

別冊

おいしいものがたり

～資料館資料編～ ■「大石田町と文人たちと」より

現在資料館で開催中の「大石田町と文人たちと」から、多くの文人たちを呼び寄せた松尾芭蕉真蹟『五月雨歌仙』を取り上げてみます。

芭蕉直筆の本資料は『おくのほそ道』にも「みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ」と記されています。この「わりなし」という語は本来「道理に合わない、つらい、苦しい、仕方がない」というように、ネガティブな意味として用いられる言葉です。するとこの場面も「せがまれたので、やむにやまれず」とか「嫌々ながら」などと訳され、あたかも不本意であったかのように捉えられてしまいます。芭蕉はこの歌仙を残したくはなかったのでしょうか。

『おくのほそ道』は紀行文ではあるものの、その描写は芭蕉が見たままとは限らずフィクションが含まれています。ですから「最上川」と題した部分に大石田で起きた意に沿わぬ出来事を敢えて書く必要は無く、後に続く最上川の描写のみで事足りるはずで。では何故「わりなし」などと言ってまで歌仙を残した事実を書いたのか。それは是非とも書き記しておかねばならない、忘れがたい体験であったからに他なりません。

奥の細道は東北の歌枕(和歌に詠まれた名所・旧跡)を巡る旅でもありました。太平洋側は能因や西行以来の歌枕の宝庫とされ、積極的に歌枕を訪れながら約一か月をかけて進んでいます。一方歌枕が少ない日本海側はさっと通り抜けてもよさそうですが実際はむしろ、より長い期間を費やしています。曾良の随行記には、出羽路以降俳諧の興行をさす「俳有」という記載が増えており、歌枕という目的から一旦離れ、訪れる土地の俳人たちとの交流に意識が向けられていったことが窺えます。

この意識のターニングポイントが大石田での体験にあったのではないのでしょうか。つまり大石田の俳人・一栄と川水に対する指導的俳諧によって蕉風俳諧の普及に大きな手応えを感じた芭蕉は、その後も同様に各地で俳諧を行っていったということです。すると「わりなし」という言葉の裏には全く逆の意味が潜んでいることに気付くはずで。本当は自信満々に、成し遂げたことを喧伝したいのです。ですから「乞われるままに」ではなく自ら積極的にその証として歌仙を残していったのです。しかしそこは大人の分別で「わりなし」と謙遜してみせ、その代わり後に続けて「このたびの風流愛(ここ)に至れり(この旅の感慨はクライマックスに達した)」と感興を記すことを忘れていません。

芭蕉は奥の細道の旅を通して「不易流行」の発想を体得したと言われています。陸奥路での歌枕巡りと出羽路での俳諧により、この概念が形成されていったとみることもできます。大石田での体験は芭蕉にそれを予感させるエウレカとして胸に刻まれたのではないのでしょうか。

(大石田町立歴史民俗資料館 大谷 俊継)

新町発足70周年企画展 第二期「大石田町と文人たちと」は9/15(月)まで



大石田町公式アカウント開設

LINEはじめました

防災情報や各種行政情報を
受け取ることができます。

友だち登録を
お願いします！

登録方法

右の二次元コードを読み
取って友だちに追加して
ください。



大石田町公式LINE

防災放送の内容を 電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時(夕方6時のメロディ等)放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL35-2111 (内線218)

町の人口 令和7年7月1日現在

世帯数	2,200戸	(－1)
総人口	5,842人	(－14)
男	2,915人	(－2)
女	2,927人	(－12)

(6月中の異動)

出生	0人	転入	6人
死亡	8人	転出	12人

※この人数は外国人も含めたものです。